

## §5. Howe の双対ペアとの関係

前回の話では、半径方向の  $L^2((0, +\infty), r^{n-1} dr)$  に  $SL(2, \mathbb{R}) \sim$  の表現が乗るということであったが、土台の  $\mathbb{R}^n$  に  $SL(2, \mathbb{R})$  が直接作用するわけではない。ここでは、 $O(n, \mathbb{R})$  とともに、 $SL(2, \mathbb{R})$  も作用している空間をとり出してこの対を考察する。

$V := \text{Mat}(2 \times n, \mathbb{R})$  を考える。  $V$  には左から  $GL(2, \mathbb{R})$  が作用し、右から  $GL(n, \mathbb{R})$  が作用する。行列の積は結合的ゆえ、この二つの作用は可換。

$\text{Mat}(2 \times n, \mathbb{R}) \cong \mathbb{R}^2 \otimes \mathbb{R}^n$  であるから、 $\mathbb{R}^2$  の標準的な非退化交代双線型形式と  $\mathbb{R}^n$  の標準内積をテンソル積する形で、 $V$  に非退化交代双線型形式が定義できる。しかしながら、以下では、 $V$  が行列の空間であることから、 $J := \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{bmatrix} \in GL(2, \mathbb{R})$  を<sup>1</sup>用いて  $V \times V$  上の双線型形式  $\beta$  を直接次式で定義する。

$$\beta(S, T) := \frac{1}{2} \text{tr}({}^t S J T - {}^t T J S) \quad (S, T \in V).$$

明らかに  $\beta(T, S) = -\beta(S, T)$  であり、

$$S = \begin{bmatrix} \sigma_1 \\ \sigma_2 \end{bmatrix}, \quad T = \begin{bmatrix} \tau_1 \\ \tau_2 \end{bmatrix} \in V \quad ({}^t \sigma_j, {}^t \tau_j \in \mathbb{R}^n; j = 1, 2)$$

とすると、

$$\beta(S, T) = \sum_{i=1}^n (\sigma_{1i} \tau_{2i} - \sigma_{2i} \tau_{1i}), \quad \sigma_j = (\sigma_{j1}, \dots, \sigma_{jn}), \quad \tau_j = (\tau_{j1}, \dots, \tau_{jn}).$$

ゆえに、同一視

$$V \ni \begin{bmatrix} \sigma_1 \\ \sigma_2 \end{bmatrix} \longleftrightarrow \begin{pmatrix} {}^t \sigma_1 \\ {}^t \sigma_2 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^{2n} \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

のもとで、 $\beta$  は  $\mathbb{R}^{2n} \times \mathbb{R}^{2n}$  上の標準的な非退化交代双線型形式に一致する。ここで、次の補題（とくに同値性の主張）を示そう。

**補題 5.1.**  $g \in GL(2, \mathbb{R})$ ,  $k \in GL(n, \mathbb{R})$  とする。

(1) 任意の  $S, T \in V$  に対して  $\beta(gS, gT) = \beta(S, T) \iff g \in SL(2, \mathbb{R})$ .

(2) 任意の  $S, T \in V$  に対して  $\beta(Sk, Tk) = \beta(S, T) \iff k \in O(n)$ .

**証明.** (1) 直接の計算により  ${}^t g J g = (\det g) J$  ゆえ、 $\beta(gS, gT) = (\det g) \beta(S, T)$  である。これより、所要の同値性を得る。

(2) 行列のトレースの性質から、

$$\beta(Sk, Tk) = \frac{1}{2} \text{tr}(k {}^t k {}^t S J T) - \frac{1}{2} \text{tr}({}^t T J S k {}^t k) = \beta(Sk {}^t k, T). \quad \dots\dots \textcircled{2}$$

<sup>1</sup>本節では行列を表す括弧は  $[ \ ]$  を用いることにする。①での書き分けに注意。

$\beta$  は非退化ゆえ、②が任意の  $S, T \in V$  に対して  $\beta(S, T)$  に等しいことと  $k^t k = I$  であること（すなわち  $k \in O(n)$  であること）は同値である。  $\square$

一般に、ベクトル空間  $W$  と非退化交代双線型形式  $B$  の対  $(W, B)$ 、あるいは  $W$  自身を**斜交ベクトル空間**という。斜交ベクトル空間の次元は偶数である。

斜交ベクトル空間  $(W, B)$  があるとき、

$$Sp(W) := \{g \in GL(W) ; B(gw_1, gw_2) = B(w_1, w_2) \ (\forall w_1, w_2 \in W)\}$$

を**斜交群**という。

したがって、上の  $(V, \beta)$  から斜交群  $Sp(V)$  が定義できる。補題 5.1 (1) は  $SL(2, \mathbb{R}) \otimes I \subset Sp(V)$  であることを示し、同補題 (2) は  $I \otimes O(n) \subset Sp(V)$  を示している。

**問 1** (1)  $n \geq 3$  のとき、 $A \in \text{Mat}(n, \mathbb{R})$  が  $SO(n)$  の各元と可換ならば、 $A$  はスカラー行列であることを示せ。

(2) (1) で  $n = 2$  ならどうか。

(3)  $O(2)$  だとどうか。

**問 2**  $A \in \text{Mat}(2, \mathbb{R})$  が  $SL(2, \mathbb{R})$  の各元と可換  $\implies A$  はスカラー行列。

**定理 5.2.**  $Sp(V)$  において、 $g \otimes I$  ( $g \in SL(2, \mathbb{R})$ ) の形の線型作用素と可換な線型作用素の全体を  $(SL(2, \mathbb{R}) \otimes I)'$  で表すと、 $(SL(2, \mathbb{R}) \otimes I)' = I \otimes O(n)$  が成り立つ。同様に、 $(I \otimes O(n))' = SL(2, \mathbb{R}) \otimes I$  である。

定理 5.2 の内容を、 $SL(2, \mathbb{R}) \otimes I$  と  $I \otimes O(n)$  は、あるいは簡略化して、 $SL(2, \mathbb{R})$  と  $O(n)$  は  $Sp(V)$  において**双対ペア** (dual pair) であるという。

### 斜交ベクトル空間と Lagrangian 部分空間

$(V, \beta)$  : 実斜交ベクトル空間,  $L : V$  の部分空間.

$$L^\beta := \{v \in V ; \beta(l, v) = 0 \ (\forall l \in L)\}.$$

$L^\beta$  は  $V$  の部分空間である。

$V' : V$  の**双対ベクトル空間** (線型形式  $V \rightarrow \mathbb{R}$  全体) .

このとき、 $V \ni v \mapsto \beta(\cdot, v) \in V'$  は線型同型 ( $\because \beta$  は非退化) .

**補題 5.3.**  $L : V$  の部分空間.

(1)  $\dim L + \dim L^\beta = \dim V$ ,

(2)  $(L^\beta)^\beta = L$ ,

$$(3) (L_1 + L_2)^\beta = L_1^\beta \cap L_2^\beta,$$

$$(4) (L_1 \cap L_2)^\beta = L_1^\beta \cap L_2^\beta.$$

**証明.** (1)  $V \ni \mathbf{v} \mapsto \beta(\cdot, \mathbf{v})|_L \in L'$  は線型同型  $V/L^\beta \cong L'$  を引き起こす.

(2)~(4) 略. □

**定義 5.4.**  $L : V$  の部分空間.

$$L : \text{Lagrangian} \stackrel{\text{def}}{\iff} L^\beta = L.$$

• Lagrangian 部分空間の次元は  $\frac{1}{2} \dim V$ .

**補題 5.5.**  $X : \text{Lagrangian 部分空間} \implies \exists Y : \text{Lagrangian 部分空間 s.t. } X \cap Y = \{0\}.$

$X, Y : \text{補題 5.5 の通りとする. このとき, } V = X \oplus Y.$

さらに,  $Y \ni \mathbf{y} \mapsto \beta(\cdot, \mathbf{y})|_X \in X'$  は線型同型ゆえ,  $X$  の基底からそれに双対な  $X'$  の基底をとる手続きにより, 次をみたす  $V$  の基底  $\mathbf{p}_1, \dots, \mathbf{p}_n, \mathbf{q}_1, \dots, \mathbf{q}_n$  が存在することがわかる (**斜交基底**という).

$$\begin{aligned} X &= \mathbb{R}\mathbf{p}_1 \oplus \dots \oplus \mathbb{R}\mathbf{p}_n, & Y &= \mathbb{R}\mathbf{q}_1 \oplus \dots \oplus \mathbb{R}\mathbf{q}_n, \\ \beta(\mathbf{p}_i, \mathbf{p}_j) &= 0, & \beta(\mathbf{q}_i, \mathbf{q}_j) &= 0, & \beta(\mathbf{p}_i, \mathbf{q}_j) &= \delta_{ij}. \end{aligned}$$

### Heisenberg 群とメタプレクティック表現

以下,  $(V, \beta) : \text{実斜交ベクトル空間, } \mathbb{R}e \text{ は } e \text{ を基底とする 1 次元のベクトル空間.}$   
直和ベクトル空間  $H := V \oplus \mathbb{R}e$  は次式によって群になる.

$$(\mathbf{v}, t\mathbf{e})(\mathbf{v}', t'\mathbf{e}) := \left( \mathbf{v} + \mathbf{v}', \left( \frac{1}{2}\beta(\mathbf{v}, \mathbf{v}') + t + t' \right) \mathbf{e} \right).$$

単位元は  $(\mathbf{0}, 0\mathbf{e})$  であり,  $(\mathbf{v}, t\mathbf{e})^{-1} = (-\mathbf{v}, -t\mathbf{e})$  である.

この群  $H$  を **Heisenberg 群** と呼ぶ.

$\beta$  は非退化ゆえ,  $H$  の中心  $Z(H)$  は  $\{(\mathbf{0}, t\mathbf{e}); t \in \mathbb{R}\}$  に一致する.

さて,  $X : V$  の Lagrangian 部分空間.

$Y : V$  の Lagrangian 部分空間 s.t.  $X \cap Y = \{0\}.$

$V$  の斜交基底  $\mathbf{p}_1, \dots, \mathbf{p}_n, \mathbf{q}_1, \dots, \mathbf{q}_n$  をとり, 各  $\mathbf{x} \in X, \mathbf{y} \in Y$  をそれぞれ

$$\mathbf{x} = x_1\mathbf{p}_1 + \dots + x_n\mathbf{p}_n \quad (x_j \in \mathbb{R}), \quad \mathbf{y} = y_1\mathbf{q}_1 + \dots + y_n\mathbf{q}_n \quad (y_j \in \mathbb{R}) \quad \dots\dots\dots \textcircled{3}$$

と表す. そうすると,

$$\beta(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = x_1y_1 + \dots + x_ny_n \quad \dots\dots\dots \textcircled{4}$$

となる。座標系③によって  $Y$  と  $\mathbb{R}^n$  を同一視し、 $L^2(Y)$  はこの同一視に基づく  $L^2(\mathbb{R}^n)$  とする。次に、 $H$  の元を

$$h(\mathbf{x}, \mathbf{y}, t) := (\mathbf{x} + \mathbf{y}, t e) \quad (\mathbf{x} \in X, \mathbf{y} \in Y, t \in \mathbb{R})$$

と表し、 $h = h(\mathbf{x}, \mathbf{y}, t) \in H$  に対して、 $L^2(Y)$  上の作用素  $\pi(h)$  を次式で定義する。

$$\pi(h(\mathbf{x}, \mathbf{y}, t))f(\boldsymbol{\eta}) = e^{it} e^{i\beta(\mathbf{x}, \boldsymbol{\eta})} e^{-\frac{i}{2}\beta(\mathbf{x}, \mathbf{y})} f(\boldsymbol{\eta} - \mathbf{y}) \quad (f \in L^2(Y)).$$

**定理 5.6.**  $(\pi, L^2(Y))$  は  $H$  の既約ユニタリ表現である。

定理 5.6 に現れる既約ユニタリ表現を  $\pi^X$  で表す。

**注意 5.7.**  $X \cap Y = \{0\}$  となる  $V$  の Lagrangian 部分空間は一意的ではないが、 $Y$  のとり方を変えても、現れる表現はもとの表現と同値である。

**定理 5.8.**  $X, \tilde{X} : V$  の Lagrangian 部分空間  $\implies \pi^X$  と  $\pi^{\tilde{X}}$  は同値である。

**注意 5.9.** Heisenberg 群  $H$  の既約ユニタリ表現  $T$  で中心  $Z(H) = \mathbb{R}e$  への制限が  $T(0, te) = e^{it}I$  となるものは、すべて同値である (Stone-von Neumann の一意性定理)。

以下、 $V$  の Lagrangian 部分空間と、 $X_0 \cap Y_0 \{0\}$  となる Lagrangian 部分空間を固定する。そこから得られる  $H$  の既約ユニタリ表現を  $(\pi^{X_0}, L^2(Y_0))$  とする。

$Sp(V)$  : 斜交ベクトル空間  $(V, \beta)$  から得られる斜交群。

$Sp(V)$  は次式で  $H$  に自己同型として働く：

$$\alpha(g)(v, te) := (gv, te) \quad (g \in Sp(V), v \in V, t \in \mathbb{R}).$$

**補題 5.10.**  $g \in Sp(V)$  とする。このとき、 $H$  の表現  $\pi^{X_0} \circ \alpha(g)$  と  $\pi^{X_0}$  は同値である。

したがって、 $L^2(X_0)$  上のユニタリ作用素  $\mathcal{U}(g)$  が存在して、

$$\mathcal{U}(g)\pi^{X_0}(h)\mathcal{U}(g)^{-1} = \pi^{X_0}(\alpha(g)h) \quad (h \in H).$$

- $\mathcal{U}(g)$  は各  $g \in Sp(V)$  を止めるごとに絶対値 1 の複素数倍を除いて一意的。
- 実際には、 $\mathcal{U} : g \mapsto \mathcal{U}(g)$  が  $Sp(V)$  の 2 重被覆群であるメタプレクティック群  $Mp(V)$  の表現になるようにできる。この表現  $\mathcal{U}$  を **メタプレクティック表現** という。

話を  $V = \text{Mat}(2 \times n, \mathbb{R})$  に戻す。斜交ベクトル空間  $(V, \beta)$  を得ていた。これより Heisenberg 群を考える。

以下では、 $\mathbb{R}^n$  を横ベクトルの空間とする。

最初に固定する  $V$  の Lagrangian 部分空間は

$$X_0 := \left\{ \begin{bmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{0} \end{bmatrix} ; \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \right\}, \quad Y_0 := \left\{ \begin{bmatrix} \mathbf{0} \\ \mathbf{y} \end{bmatrix} ; \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n \right\}.$$

そして,  $H$  の各元を  $\left( \begin{bmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{y} \end{bmatrix}, te \right)$  ( $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n, t \in \mathbb{R}$ ) で表す.

$H$  の既約ユニタリ表現  $\pi := \pi^{X_0}$  on  $L^2(Y_0)$ .

$SL(2, \mathbb{R}) \times O(n, \mathbb{R})$  の各元を  $Sp(V)$  の元と見るときの  $V$  への作用は

$$\alpha(g, k)\mathbf{v} = g\mathbf{v}^t k \quad (g \in SL(2, \mathbb{R}), k \in O(n)).$$

各  $k \in O(n)$  に対して,

$$T(k)f(\boldsymbol{\eta}) = f(\boldsymbol{\eta}k) \quad (k \in O(n), \boldsymbol{\eta} \in \mathbb{R}^n).$$

このとき,

$$T(k)\pi(\mathbf{v}, te)T(k)^{-1} = \pi(\mathbf{v}k, te).$$

次の  $SL(2, \mathbb{R})$  の 1 パラメータ群  $a(s), n_+(\xi)$  と元  $w$  を思い出そう.

$$a(s) = \begin{bmatrix} e^s & 0 \\ 0 & e^{-s} \end{bmatrix}, \quad n_+(\xi) = \begin{bmatrix} 1 & \xi \\ 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad w = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{bmatrix}.$$

このとき,

$$U_A(s)\pi\left(\begin{bmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{y} \end{bmatrix}, te\right)U_A(s)^{-1} = \pi\left(\begin{bmatrix} e^s \mathbf{x} \\ e^{-s} \mathbf{y} \end{bmatrix}, te\right),$$

$$U_{N_+}(\xi)\pi\left(\begin{bmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{y} \end{bmatrix}, te\right)U_{N_+}(\xi)^{-1} = \pi\left(\begin{bmatrix} \mathbf{x} - \xi \mathbf{y} \\ \mathbf{y} \end{bmatrix}, te\right).$$

また,  $\mathcal{F}$  を  $L^2(\mathbb{R}^n)$  上のユニタリ化した Fourier 変換とすると,

$$\mathcal{F}\pi\left(\begin{bmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{y} \end{bmatrix}, te\right)\mathcal{F}^{-1} = \pi\left(\begin{bmatrix} -\mathbf{y} \\ \mathbf{x} \end{bmatrix}, te\right).$$

これらと  $a(s), n_+(\xi), w$  の  $V$  への作用と整合性を持たせるために, 次で定義される

$SL(2, \mathbb{R})$  の自己同型  $\gamma$  を導入する. 各  $g = \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \in SL(2, \mathbb{R})$  に対して,

$$\gamma(g) := \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a & -b \\ -c & d \end{bmatrix}.$$

このとき,  $\gamma(a(s)) = a(s)$ ,  $\gamma(n_+(\xi)) = n_+(-\xi)$ ,  $\gamma(w) = w^{-1}$  が成り立つから,  $\alpha$  の代わりに  $SL(2, \mathbb{R}) \times O(n, \mathbb{R})$  の  $V$  への作用を

$$\alpha_\gamma(g, k)\mathbf{v} := \gamma(g)\mathbf{v}^t k \quad (\mathbf{v} \in V, g \in SL(2, \mathbb{R}), k \in O(n, \mathbb{R}))$$

としておけば, 作用素  $U_A(s), U_{N_+}(\xi), \mathcal{W} = e^{-in\pi/4}\mathcal{F}$  が, Heisenberg 群の既約ユニタリ表現  $\pi(\mathbf{v}, te)$  と  $\pi(\alpha_\gamma(g)\mathbf{v}, te)$  ( $g = a(s), n_+(\xi), w$ ) の間の絡作用素として現れていることがわかる.